

## 『蝉の聲（仮題）』翻刻と解題：不角の追善集

平島, 順子  
純心女子高校教諭

<https://doi.org/10.15017/10364>

---

出版情報：文献探究. 34, pp.1-19, 1996-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



# 『蟬の聲（仮題）』 翻刻と解題

不角の追善集

平島順子

## 凡例

- 一、底本には、愛知県立大学古俳書文庫蔵本を用いた。
- 一、本文は底本にできる限り忠実であることを旨としたが、読みやすさを考え句読点を付した。
- 一、ルビは全て原本通りとした。
- 一、丁移りは「（一・オ）の如く示した。

## 哭先考辞

不局  
壽角述

不定の境を觀すれば、鳥の林に集か如し。死生命有。父世に在しとき語給ひしは、或時母語て曰、汝腹にやとりて七日出産なく、医術にも及はず、頭腰も、穩婆も手を束ねしのミ也。母の心に、とても叶はぬ出産ならば、二人に成て命終ん事をおもひ侍りに、坐せし向ふに蛭子の宮を棚に置たるか、」（二十七・オ）彼宮の扉、をのれと開く。母おもへらく、鼠などの業にやと思ふ所に、蛭子出させ給ふ。あはふしきさよとくるしき中にも目を放さず見て居たる蛭子、棚の端迄出させ給ひ、棚よりすぐに我かふところへ飛入らせ給ふと、汝は子かえりもなく、立ながら出生したり。然れとも血のミちもなく、常のごとくにそ有ける。汝、生れは生れたれとも、泣聲もなく、

只白瓜の如く、」（二十七・ウ）赤き事微塵もなし。付添ふ人と、水子八なくとも、其身の堅固成こそめてたけれと悦ひの眉を開きて、赤子は日くれ葬るへしと、屏風の角に小袖にかいくるみて置しに、日くれて、井戸の底にて啼ことく、わずかに聲有り。是を聞て、扱ハ此子八死さりけりとて、遊左好トと言ふ医を呼て、薬を用て汝は人と成たるよし。それより成長の後に、」（二十八・オ）一柳軒不ト先生の門に入て俳道を学ひ、終に此道の師と成り、官は法眼迄に昇り、一日も煩はしき事なかりしに、去年仲夏末の比より、何となく食事す、ミかね、薬を用れともしるしなく、或時医、申されしは、食事まいられは快氣有へしと。其時、我九十二歳迄存命、惜む命になし。命終れば、弥陀同躰に歸し、佛国土の快樂を得ん」（二十八・ウ）事、何ぞ歎く事有らんやと安心決定をなし、また、我々兄弟に示して曰、阿柴か詞のことく、兄弟中離れぬやうに。別て不局、壽角は俳道を業となせは、心を合せ、正風繁昌になす事、孝の至り也と。門弟衆中へわかれの一句、また空蟬の辞書を吐て、六月廿一日午刻、眠かことく長き息絶たり。齡も佛に三の兄ながら子の身としてハ、千年の坂も」（二十九・オ）越なん事をおもひしに、老少不定のごとはり、歎きても其甲斐なし。今身まかり給ふといへとも、名ハ天地と共に朽る事なく、死て不レ亡者ハ、壽といへとも此世の名残を惜ミをしみて、築地本願寺地中成勝寺へ送り、葬ぬ。不思議成哉、異香薫し、音楽の聲聞ゆ。成佛にうたかふ所なく、難在く。

扱諸家より追善、追悼の」(二十九・ウ) 哭詞を給ふ事悉く  
書集て靈前に備、猶梓に鏤め、御厚恩を奉服もの也。」(三十・オ)

夏の夜や其儘西へ松の月

豊原氏  
古吟

千翁辞世狂哥

死ハせぬ往て生るゝ身にしあれば南無あミた仏ぞおぎやあ也ける

うたかいなし  
時鳥佛の御名を尋見ん

中根氏  
編里

六月廿日の夜曰、あすの昼八ッ時分に八命終成へしとて

八ッの物八ッにかへせばさつはりとかし方もなかり方もなし

果して廿一日、寂然として眠ることく息絶。」(三十・ウ)

夏の夜や御名残おしき松の月  
(三十一・オ)

西垣氏  
里詠

故宗匠の遺吟を聞て、時ハ夏も過ぬれば  
今聞も遺響高し蝉の声

知久麻

九十二年松月堂の月を雪

清誉堂  
交貴

又、衆人へ残されし一句に慟して  
方士あらは聞つと告よ時鳥

全

紫の雲の峯にそ姿の月

小嶋氏  
友龍

本尊かけてみんな回向を時鳥

菊村氏  
可笑

師翁、水無月末の一日身まかり給ふよし、漸葉月中比遠境に  
告來<sup>ル</sup>。聞とひとしく断腸のおもひをなす。さりながら一生  
を風雅に鳴り給ふ事、徳のいたらぬ隈もなし。 姫路  
磨<sup>キ</sup>揚<sup>ケ</sup>し月の入さや木賊山 後藤氏  
卯角  
「(三十一・ウ)

月入れと音八あかるし奈の風

芳賀氏  
寿明

師君、一生を安く送り給ひしハ、流水の如。俳風の世に満た  
るハ、方圓の水の如し。  
行時ハ猶も濁らぬ清水かな 虎角

露を置て月八あの世の光り哉

餐月堂  
枕角

松の月入<sup>ル</sup>や雲路の西の空

潤月堂  
民角

千翁先師、ミな月の比身まかり給ひしを、やうやく神無月の  
初つかた傳聞侍り、辞世の「(三十二・オ) 蟬の声にすかり  
て  
蟬の声夢と成行時雨かな 北越  
神戸  
藏鼠

杖笠もいらぬ夏野の首途哉  
おなしく辞世によりて

同所  
素行

其時の時雨残るや神な月

同所  
芦舟

はかなさハ消る時あり眉の霜

同所  
哥月

落葉して梢もかなし嵐あと

雨暁

暑<sup>イ</sup>事思い出さるゝ寒<sup>サ</sup>哉

花ト

月雪に道八明るし後の族

文嗣

雪なから咲て手向や冬椿  
(三十二・ウ)

芦橋

手向はや百味の外に冬牡丹

一志

置て行松にかたミや今朝の霜

左文

其二

松月堂大名、年來傳聞侍りけれとも、終に拝顔の望もむなし  
く、ことし水無月、比身まかり給ひしを聞侍りて  
倅や闇夜に鳴し時鳥

北越弥彦住  
角阿

誹人千翁有。辞世句曰、空蟬本裸歸。此翁悟」(三十三・才)  
道發明哉。因作頌以遥贈之。

聞道千翁九十餘  
黄泉一念一行書  
歸來羨爾被開見  
何處化城乘大車

北越天照山主守中稿

予先生へ對顔を望む事久し。いかなれは大望を不達身まから  
せ給ひぬと、聞て今更千悔」(三十三・ウ)するに益なし。

露落て玉に卞和か涙かな

羽州上山  
淡水亭  
不改

故先生の法名を開て

香になる反魂艸の種もかな

全

水無月のすへの比、尊師世を去給ひぬと聞ながら公務にいと  
まなく、うかくとするうちに、光陰もはや冬近うなりぬ。

今ハはや其名はかりそ仙翁花

汀月堂  
湖角

涼しからん二重後光に阿弥陀笠  
(三十四・才)

玉月堂  
巡角

水無月やほまれ八沓す名取川

友文堂  
不放

松月堂法眼師、身まかり給ひて、誹門一同の悲嘆甚し。予も  
数歳教示に預り、愁憂餘り有。熟おもふに、亡師の誹徳古今  
絶倫と謂つへし。支那の昔人の賛に、孔子以前無孔子、孔子  
以後無孔子と稱し、本朝の過し人、先生更無先生といへるを  
おもひたくへて

過去未來類ひあらしの松の月

不呈

羽衣て蟬シユウミカ名敷ミンくみ

水鏡堂  
風揚

是なん世尊入滅の時、有情、非情共に馴れを惜ミて嘆きしに  
等し

涅槃會に蚊も出て啼ッ心地なり

全

松月翁身まかり給ひしと (三十五・才) 聞て、不及ながら  
一句を綴奉る。  
秋近く光りを惜む虫かな  
友書齋  
不爭

蓮に瞬の縁はしらねと異名によそへて  
口に負て長く眠れり水芙蓉

千莪

大老師の遺章に空蟬の吟あれば、及すなから本歌を以テ追福  
に備ふ。  
空蟬の身をかへてけり木のもとになを人からのなつかしきかな

空蟬の其高<sup>キ</sup>名を残し尙

遊文堂  
不退

假の宿かえて蓮に大安座<sup>アツラ</sup>

守信堂  
不話

松の葉や散跡栄ふ夏木立  
(三十五・ウ)

意慶

父におくれし人へよみて奉りける  
いつまでもしたふ心はつきせしな袖の涙はかきりありとも

貞章

尊師も不生不滅  
月八西しはしそ隠雲の峯

陰角

もろこしの孫楚といえる人は、王氏の喪に驢鳴をなせし。その好める所を以ての故なんかし。今法眼師ハ、正風誹諧（三十六・オ）の棟梁たりしも、宝曆三ツのとし水無月すへつかた、忽に仙遊し給ふ事、知るとしらさるの悲しミ也。予、又多年恩徳を蒙り侍りし事、少しからず。繼に志を述て孝子の喪を訪ひ奉ぬ。

宝曆三癸酉稔

花月堂  
吳遊  
獨吟

(三十六・ウ)

夏月や手も復れず雲かくれ

光<sup>リ</sup>ハ残る明<sup>ケ</sup>の螢火

心よく涼しき風に旅立て

乗<sup>ル</sup>駕籠の内居間の盛切<sup>リ</sup>

生酔も蒼らるゝの八伽の規模

厚<sup>イ</sup>耳垂果報有<sup>ル</sup>人

二合半今ハ難波て七五三

袋足袋にて喰る輝

老ぬれハ葉嫌ひも太補湯

崩さぬ行義列坐鷹行（三十七・オ）

大石か月に捧る仇の首

夜霧とともに晴るゝ妄執

惚られて称宜に靡し時参<sup>リ</sup>

果ハ苦の種恋の跡腹

貰ひ乳にあくむ離別の置ミやけ

玉手箱なり米櫃の売

野巫醫師の花咲事もなかりしに

是や膝栗毛自己の春駒

俳諧法の連

夫普門は、空假中実相の五つ、(三十七・ウ)にして則チ円融の妙観也。故先生の師恩、母恩の二集を閱れば、經文を以て文なし、實に哀情を竭シ給えり。或とき、蠅袋と外題せし集を見しに、或人の問に應え給ふ前書にて

法の橋法の眼の涼しかれ

と何れ法の縁を因ミ給ふの深き事、見はに知れ侍りぬ。扱も本意の如くの位に進ミて、最ト愛ガ(三十八・オ)りしも、此年なる月日に、五の塵を拂つて為樂の境に臨ミ給へり。はかなき口つきしなから、法の縁にすかりて十と八の句の中に第二十五の巻を其所此所書散して、友柳軒の喪屋を訪ひ奉りぬ。

はつ秋の日

故法眼門裔  
篝角

妙法蓮

實ハ飛んで薫リハ残る蓮哉

以是因縁

露の因縁にあはれ増虫(三十八・ウ)

觀世音

月を世の友と観して夜更して

雲雷鼓掣電

雲雷ハ不知火打電光

十方諸國土

十方を旦那て暮ス番太郎

福德知恵

慇懃にして徳取るも智恵

妙音

妙音と淨瑠璃好奇の牽頭持

以種々形

種々な形を伊達な風俗

自在神通力

御鼻毛算へて自在をやる妾

能為作依怙

依怙に傾く国の政道

念々勿生疑

賢人は念ヒ々に身退き

金銀瑠理 無欲な目に八徒な金銀(三十九・オ)

於此怨賊 怨賊も痛入たり如藏尼

現此佛身 佛身もどきふかき慈悲心

刀尋段々壞 見通を段々壞や不義の咎

走無邊方 媚誘引て對の走無邊方

娑婆世界 忍ふ世界月に雲也花に風

童男童女 巢の鶯と守リ立ル童男

過し巻中の色紙に、行年九十二書すと遊はせしも、今八御記  
念と成けるか。

忘れぬ薫リや蘭の花の後

(三十九・ウ)

銚子  
守中堂  
篝角

常盤樹ハ落葉の後もときは哉

新月堂  
温角

さすかに高き御表徳も

哀れ松消て跡なき夏の霜

野草



影きえてまつに声なし夏の霜

扇角

惜いかな君子の色香終る蓮

林泉會  
可候

入る方八かならず西そ松の月

風和

暑哉焼香は次き水供養

慎角

小見川連

其山八空に入鳧雲の峯

宝實堂  
不越

要ぬく扇は夏のわかれ哉

全

扇揚げ招と入りぬ松の月

風再堂  
桐角

撫子に残す風雅のうつ高し

季篠

世の簞月を残してほとゝきす

淳角

入際の涼しき名のミ夏の月

宗瑞門人  
三際庵  
硯事

心さし萩の葉にあり露まつり  
(四十・才)

全

名の風雅や凧でも薫り残る風

小堤氏  
友志

夏過て最う止たりや蟬の声

石井氏  
喜榮

陸奥連

散る蓮去爰不遠なり元の水

大田氏  
芦舟

辭世の玉吟を借用ひて  
もとの裸きさんしな事涼哉

環意

名の誉れ雲井に残る雲雀哉

左田氏  
調之

世に鳴て正しく蟬のもぬけ哉

珈足

産捨になる身そ悲し時鳥  
(四十・ウ)

時合

夢の世の佛見たり蟬の空

祇帆

虫干に涙の種そ清鮑

柳姿

身八かえつ名八夏山の蟬の声  
(四十一・オ)

岩亀

空蟬のさつき花散る名残かな

玉蘭堂  
荃角

散る蓮や汚泥を去て元の水

湘川

黄落と聞言の葉も名残かな

把桂

雲に入て其声ゆかし時鳥

涯青

蘭の香や散れと心に名の匂ひ

同  
不允

今や知る涼しき元<sup>ト</sup>の居<sup>ル</sup>所

城夫

翁の身まかりしも山川萬里を隔れは漸中秋の末に聞待りしゆ  
へ、わけて歎にまさりて  
干ぬ袖八五月雨にあふ梢かな

同  
不休

限りある声ハ是非なし時鳥

常有

空蟬やなをなつかしき風薫<sup>ル</sup>

友竹堂  
不曲

今生の果を見て過去未来をもしるといへは  
さそや嘸今ハ弘誓をすゝみ船

一城

松も暑に千年を待じ不<sup>コ</sup>活の旅

勸忠堂  
不桓

短夜やさめて八いかに見<sup>ル</sup>つる夢

十伍

惜めとも散りし蓮の君子哉

柳池堂  
虹角

残り鳧世にも袖にも慮橘の香  
(四十一・ウ)

姫路  
不仮

普賢菩薩と奉仰て  
涼しさや御身白雲に打乗て

玉置亭  
不方

「(四十二・才)

九十二年世にあふかれて風涼し

芙蓉堂  
不峻

十八里聞鐘の麗」(四十三・才)

右畢  
宝曆三癸酉歳

空蟬の跡声高き時雨かな

羽州山形  
東泉堂  
雉角

満光院法眼釋定月不角居士牌光正  
嚙浄土穠土さへ涼し松の月

好文堂  
不怠

伽の伽嘶すをめとに取りまいて  
廻す盃箸の品玉

たいさうに景氣計の茶屋料理  
人の通りに響の馬鹿

駕舁の苦もなさうに朝馬  
大門出ても傾城を永観」(四十二・ウ)

恋病に尻持顔も一療治  
相店殿も鬮煮鍋

御国例へ名主祭りの櫛也  
袴くるミにもめし人栖

晴る、月文字に数通の呼使  
釈迦にハ提婆踊にハ大碎フ

跡憎き伯父歎念者か小鳥籠  
伊達に出立江戸入の朝

冢の花花守の鞍に虎の革

予も一七日、寸志の御経申折から庭前の姿にさやかなる月影  
のうつりければ  
庭の訓在マかことし松の月  
全

濡る袖笠より下の夕立哉  
(四十三・ウ)

長影堂  
姿角」

時しもあれ大古郷の蓮見に

柳下齋  
鯉欣

明けて待給へ  
遅くとも一ッ蓮や涼臺

不局母  
観月

居なれた地隠居をなして花を友  
士のほまれ八春を九十二

蜘蛛の巣ハ心よからぬものと仰られしも  
蜘蛛の巣もなし蓮臺の夏座敷

妙船

空蟬のあはれ八人をなかせ鬼

不局  
妻

病中心を尽といへとも其甲斐もなく  
暑に困ふ氷も終に元の水  
(四十四・才)

不局

蚊に蟬に汝もともになきに鬼

一角

法號の文字を冠に置、首尾の唞をなし、備靈前

不局

汗ならて袂ぬらしぬ夏衣

同  
妻

満名を残して西へ月涼し  
光あらはず規模化た艸  
院尊官を得し身と仰かれて  
法を一生違さりけり  
眼を白なして愚な子へ教え  
釋書の意味を噛てくゝめる  
定まつて当るハ易の上手也  
月の下旬と臨終御存し (四十四・ウ)  
不覚悟にあらぬ心ハ世の鏡  
角屋ゆづゝて未永い富

御舌や露の蓮の末期水

寿角

父の慈恩請る事、須弥山 (四十五・才) 尚低し。然るに聊  
の孝もなさざれば、今更臍を噛めとも甲斐なし。亡骸にすが  
りて罪を詫まいらするはかり也。  
そよ風や揺ば百合の小點頭

寿角

既不能事人、又焉能事鬼。人鬼雖不同、其理何嘗異と邵子の  
吟を思へば愧恐ながら、備靈前。

空蟬や空蟬の世と知りながら

(四十五・ウ)

全

三七日

さなきたに物の淋しき秋暮、袖の露いと、乾かす  
茶調虫汝さへなくか初昔

寿角

弥陀身色如金山

御佛や涼しき国の裸富士

全

三七の花も佛の膚かな

全

炎暑の節成に穢臭少もなく、惣身白く光澤ありて水晶のこと  
し。恵情子の曰、吾数百の貞刺するといへとも、か様に木像  
に寄りそふこと清浄成往生人ハ始めてにて待ると。

音もなく臭もなし蟬の蛻

全

肖像に向へは如在にて心も慰ミぬ

さし鯖ていざ木像を生身玉

全

葬の時、誦経も終りければ、知る」(四十六・オ) しらぬ人

あまた来りて、廓に懸たる白布守りにすとて、五寸、三寸引  
きり、ことくく持されり。長寿の徳なるへし。

哀也枕にのこる蚊の血さへ

寿角妻  
荻花

去秋の今宵八ともに詠て、とありしかくありしと様く愚癡  
の起りて」(四十七・オ)

月ミれ八父に物こそ悲しけれ

寿角

きのふけふのやうにありしか、初冬三日はや百カ日

蟬の音も今ハ誠そ時雨月

全

散蓮や浮合掌の片拳

辰角

されはこそ火は本の火に昼軒

全

汲む清水楯をじに片便

全

夏の夜の霜も日を得て別れ哉

不茎

御悦さそな弘誓の夕涼

千虎

我宗は此世から成仏にうたかないなし。今佛国土へ至らせ給へ  
は

涼しさ八佛いよく仏かな

全

蓮葉の上は無量のすゝみかな

勝角

二重笠御世話もなしや佛国土

不柳

初月忌なれは

跡月のあはれに戻る秋の暮

全

夏なから毒と上ぬを末期水

同妻

(四十七・ウ)

(四十八・オ)

人のもとより軒といふ虫を御なくさみとてこし待を思ひ出て  
紙に籠に裏なる玉の軒哉

帖角

芳名高き事を

蓮の花散て薫り八残り鳧

連山

夕立も及ぬ程や我が袂

同妻

汗より八かはく間もなき泪かな

不龍

御葬送供に立し折から  
秋近し露に先達泪かな

松角

涙迄そへて手向の清水かな

寿泉

あきらめてもく  
蓑虫の声八立ねと袖の雨

寿角

木像の常秋しらぬ姿

三千代

(四十八・ウ)

拓<sup>イ</sup>てもなと月西へ入<sup>ル</sup>やらん

利角

周<sup>イ</sup>を鹿子島に楽な大隠

雷和

献上の淡盛砂<sup>コ</sup>て二篇<sup>コ</sup>

毫角

壺公<sup>ウ</sup>八いかに壺の塩辛

不方

見せ物にはるく江戸へ出る河童

不柜

木偶に品玉させて世渡  
先主の祟<sup>クサリ</sup>て釋迦と御同国

悪事懺悔八法<sup>リ</sup>の詫言

与右衛門か重荷をおろす退た靈

我我に成<sup>ル</sup>面瘦<sup>シ</sup>に肥

(四十九・オ)

鬘<sup>カク</sup>迄写<sup>ス</sup>ハ誠繪そら事

見出<sup>ツ</sup>ぬ敵足を摺小木

曲にあらて尺八に仕込し乱焼

種々に姿を替てどろぼう

月に契<sup>キ</sup>る瓜番花の美婦八狐

尾を提帯に猫の姉様

鶉角

千如

蘭角

正角

快角

帖角

辰角

千桂

姿角

不局

不茎

先考佛国土に至り、じろくと見ておはしますへし。つゝし

ますんは有へからず。

暑哉昼寝枕八有なから

(四十九・ウ)

汗<sup>ア</sup>干<sup>ク</sup>付<sup>ル</sup>能<sup>ク</sup>因<sup>ノ</sup>顔

塩<sup>シ</sup>壓<sup>キ</sup>の梅を莖<sup>ヒ</sup>に取出<sup>シ</sup>て

おつと左へ突<sup>キ</sup>やれ御座頭

満月八黄昏時の穉<sup>チ</sup>もなし

明日<sup>アス</sup>の仕事<sup>シゴト</sup>の稲<sup>イネ</sup>もかり込<sup>ミ</sup>

草<sup>クサ</sup>臥<sup>ス</sup>し象<sup>ゾウ</sup>すさまじき高<sup>タカ</sup>煎<sup>セン</sup>

蠻<sup>マン</sup>を吞<sup>ム</sup>だ孔明<sup>コウメイ</sup>が臍<sup>シ</sup>

智仁勇三<sup>チニユウ</sup>ハ心に着具足

不局

一角

寿角

辰角

千虎

執筆

勝角

帖角

不茎



行余力有時は聖堂

四枚肩に乗て見せうと拜ムビ

〔五十・オ〕

位相を當に待し任官

涼む月手の筋坊主さそわれて

千引キ西瓜ムラカクに秤群

禿とも雀宴中の町

破れし文は恋の切れく

振袖の花ハむかしと畳ム衣

彼岸の内ハ日々に談儀場

暖ヌカサにて蛇親仁迄穴を出る

轉マユルと中氣うそ吹キの頬

切キして行祭跡見ミず御幣持テ

〔五十・ウ〕

矢より嫌ひハ母衣武者に雨

鎧着たこんにやく臆オソに出るふるひ

人に負ルハ無恙癩癩

遁世ハすれと心ハいままた俗

金くすね込本尊の腹

懇意ぶり来ル野伏等にあきはてる

茶請チくクに味噌もげつそり

宇治立ツて月の都へ大納言

紅葉に一葉多クいたのしミ

おく山の友鹿の声さるの聲

〔五十一・オ〕

道德トク恐ソて天狗見廻ミす

祖父様の葬礼異香薫シます

不龍 一角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

鳳フウた日和もけふハ晴く

舞楽にて乗り出ス船の花心

子賣の手は福引キの縄

不局門

不局門

印（不爭之印）印（洗心）〔五十一・ウ〕

不龍 一角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

不局 辰角

〔天地心〕

凡有天地心、有地仙、和歌ニ有六仙、俳諧ニ有七仙為ルヤ。其俳諧ノ道、本和哥一体也。其和歌の道たるや、千早振神代のことの葉にして、末の世も猶詞の華繁し。連歌ハ、新墾筑波の句に始り、至宗鑑、紹巴等ニ殊に昌シにして、非無シモ其仙。而花咲翁の徒ラ句中に交ハ俗語ヲ轉ル〔五十二・オ〕。蓋俳諧體の狂句ならんか。それよりして此道都鄙に流行して知らざる者少ク、又知れる者少シ。爰に古松月堂、若かりし時、一柳軒の門に入て俳学シ、道既ニ貫通して、或ハ遊キ過リ三景ニ、或ハ之テ見鎌中ヲ。歳四十有二、剃髮して初テ到ニ花洛ニ、尋ニ佳景ヲ、聿ニ参内して任法橋、歸府ノ後、門人益進ム。郷に杖ヲ号千翁ト、國に杖ヲかん頃ト再上京シ〔五十二・ウ〕て叙フ法眼ニ。歸來れば八十瀬川、老の波おたやかに、八重の塩路さへ平らか成春を迎て、櫻さく遠山鳥の齡迄も万ツ無キ不レ任心ニ。百歳曾無百歳人果夫然リ。一朝臥テ病医療其驗なく、寶曆癸酉季夏廿一日、行年九十有二、辞世二句を遺せり。惜イ哉、杜鵑夏雲に高ク飛去リ、悲イ哉、蟬姑秋風に空く啼盡しぬ。門人如慕考妣ヲ。矧於テ家族ニ。更在（五十三・オ）世の時、嘗テ予に語て曰、今の俳諧といふも和歌の遺

風にして、六牀に洩るゝ事なし。然といへ共、人物氣質音しからず。故<sup>ニ</sup>何<sup>レ</sup>の風義、何<sup>レ</sup>の流義など云て各派<sup>タリ</sup>。一方<sup>ニ</sup>予<sup>カ</sup>風義ハ、貫之の土佐日記にひともしをたにしらぬものしか、あし八十もしにふミてあそふとなん書り。此文こそあはれあやしく妙成ものをと古風<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>作意<sup>ラ</sup>吾俳諧とすと云。愚退<sup>テ</sup>竊<sup>ニ</sup>監<sup>レ</sup>れは、句曲言<sup>」</sup>（五十三・ウ）工成ものあり、風情優美成もの有、妙作骨肉依被<sup>タリ</sup>。嗚呼其俳徳<sup>ヲ</sup>、於戯其文才<sup>ヲ</sup>、噫嘻其潤澤<sup>ヲ</sup>、烏鞏其長壽<sup>ヲ</sup>。若<sup>キハ</sup>英師、實<sup>ニ</sup>俳中の神仙慶宝、百年の一人。一生の絶唱、不可枚挙。編<sup>ル</sup>所の集物略百版、七十五板回録す。而友柳軒、松千堂復能<sup>ク</sup>勉彼業<sup>ヲ</sup>、其道廓然<sup>ク</sup>。父子の別離、啼泣して追善追悼の悲吟、紳稿をしらへて乃<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>鑲梓<sup>ニ</sup>備<sup>ヘ</sup>。〔五十四・オ〕靈前<sup>ニ</sup>、且欲謝喪人志<sup>ニ</sup>。観月堂、首編揮<sup>テ</sup>毫<sup>ヲ</sup>、能<sup>ク</sup>拔師<sup>カ</sup>磊落之奇才<sup>ヲ</sup>、而<sup>ニ</sup>先生亦有哭先考辞、可言盡。予在<sup>テ</sup>其後徒<sup>ニ</sup>画蛇足<sup>ヲ</sup>而已。

寶曆甲戌秘孟夏

蟠桃軒

三千世跋

印（夢眠斎）印（武州）

（五十四・ウ）

解説

一 書誌

愛知県立大学古俳書文庫蔵本（0二七―三〇四―1）。版本。半紙本一冊。（定本）『愛知県立大学附属図書館特別書庫目録（一）』（愛知県立大学・愛知県立女子短期大学 昭和四十九年三月）には書名を「〔不角追善集〕」として所載。

○表紙 黄土色表紙。二十二・七×十五・九糎。

○題簽 左肩。粹なし。文字は剥落して読めず。十四・〇×三・六

糎。

○丁数 二十八丁。

○見返し なし。

○内題・尾題 なし。

○柱記 なし。

○丁付 「二十七」→「五十四」。

○匡郭 なし。

○行数 十行。

○挿画 なし。

○刊記 なし。

天理図書館綿屋文庫蔵本（わ―一四〇―八）。写本。半紙本一冊。

○表紙 萌黄色表紙。二十三・七×十六・四糎。

○題簽 左肩。粹なし。「<sup>寶曆四</sup>蟬の聲」。「<sup>寶曆四</sup>不角追善」。『<sup>寶曆四</sup>蟬の聲』の部分は朱書、「<sup>寶曆四</sup>不角追善」の部分は墨書。十五・八×

三・三糎。

○旧蔵者 石田元季氏（「石田文庫」の印）。

天理図書館綿屋文庫蔵本は、数ヶ所濁点・ルビを落とした箇所等はあるものの、版本を字形、字配り、丁付等までそっくりに臨模したものである。石田元季氏旧蔵書であり、写されている部分が愛知県立大学古俳書文庫蔵本と同じ二十七丁目からであることより、綿屋文庫蔵本は古俳書文庫蔵本の写しであるかと思われるが、二十九丁裏の最後の一行である「<sup>宝曆四</sup>拊緒家より追善追悼の」の部分を落としている。

## 二 解説

『蟬の聲』は不角の追善集である。刊記はないが、三千代の跋（五十四・ウ）に「寶曆甲戌稔孟夏」（宝曆四年四月）とある。『俳諧人名辞典』（高木蒼梧著 明治書院 昭和三十五年六月）の「不角」の項において「小祥忌にその子の不局・寿角により追悼集が出されている」とされるのは本書をさすものであろうか。未紹介の資料である。『蟬の聲』という題は、書誌のところでも触れたが天理図書館綿屋文庫蔵写本の題簽に「蟬の聲」とあるのに従ったものであり、仮題である。底本とした愛知県立大学古俳書文庫蔵版本を所載する『愛知県立大学附属図書館特別書庫目録（一）』（前出）では『蟬の聲』の書名を「（不角追善集）」として載録し、「『俳諧書籍目録』にいう『うつ蟬』か」と注記するが、指摘の通りこの『蟬の聲』は『うつ蟬』の下巻である可能性が高い。『蟬の聲』は二十七丁からはじまる欠本であるが蟠桃軒三千代の跋に「観月堂、首編揮毫、能抜師、磊落之奇才」（五十四・ウ）とあることより観月堂の序文を付した上巻が存したことが知られる。『国書総目録』（岩波書店）で『うつ蟬』を閲すると「うつ蟬 俳諧 柳軒 宝曆四 \*俳諧書籍目録による」と記されており『うつ蟬』は『俳諧書籍目録』（『新群書類従』）所収。明治三十九年五月には書名がみえるものの、現在所在が不明であることがわかる。『俳諧書籍目録』には『国書総目録』が記している通りのことが書かれているのであるが『うつ蟬』が不角の追善集であるとすれば著者であると思われる「柳軒」は不角の長男不局の軒号「友柳軒」であるかと思われ、また成立が「宝曆四」年であるとするのは『蟬の聲』の三千代の跋（五十四・ウ）に「宝曆甲戌稔孟夏」とあることとも一致する。不角の辞世の句は「空蟬はもとの裸に戻けり」であるが『うつ蟬』という題は不角の追善集の題名としてもふさわしい。し

かし、可能性はあるものの『蟬の聲』が『うつ蟬』であるとすることは未だ決定的な証拠を欠いているため、書名は天理図書館綿屋文庫蔵写本に付されている仮題に従って『蟬の聲』としておくこととする。

欠本ではあるが、『蟬の聲』により新たに得られる情報は多い。不角の長男不局、次男寿角によつて述べられた「哭先考辞」（二十七・オウ三十・オ）、及びそれに続く文章（三十・ウ）により、不角が難産の末に逆子の状態で出生し、ほとんど死んだような状態（仮死状態であったか）であったが、遊左好トという医者のの介護により助かったこと、亡くなる一月前にあたる宝曆三年五月末頃より体調を崩したこと、亡くなる前日の六月二十日の夜に読んだ狂歌、辞世の狂歌、亡くなる時の様子、及び築地本願寺地中成勝寺へ葬ったこと等が知られる。不角の次男寿角の妻荻花の句の前書（四十六・オ、ウ）からは、不角が九十二歳と長生きであったことより「葬の時、誦経も終りければ、知るしらぬ人あまた来りて、廓に懸たる白布守りにすとて、五寸、三寸引きり、ことくく持されり」という、おおよそ喪礼にはふさわしくない出来事があったこともわかる。不角の八十歳を記念して不局、寿角により編まれた『八十公』（寛保元年。東京大学酒竹文庫蔵本）中の不角の文中には、「祖父八百十二歳、慈父八八十二、母八七十七の寿也」とあり、不角の一族は代々長生きであったことが知られるが、長生きにあやかろうとする風潮は今も昔も変わらないものであることがあらためて思われる。また好文堂不忌の半歌仙の前書（四十二・ウ）、及び不角の長男不局の詠んだ連句（四十四・ウ、四十五・オ）により、不角の法號は「満光院法眼釋定月不角居士」であったこともわかる。不角の墓に關しては、素竹「○俳士の墓（其二）」（『卯杖』第五號 秋聲会 出版部 明治三十六年五月）に次のような報告がある。（句読点を

私に施す)

△立羽不角墓(全上)

法眼不角の墓は同じく成勝寺に存し、本堂階段の左傍に在り。

墓表高さ二尺一寸斗りの柱石にして、正面の頭に定紋を彫り、

中央に先祖代々の四字、其左方に『満光院法眼釋定月不角居士』

右方に寶曆三癸酉年六月二十一日と記し、側に辞世の句、其

臺石に立羽の二字を刻めり。(中略)

寶曆三年六月二十一日没、行年九十二

辭世 空蟬はもとの裸に戻けり

成勝寺は浄土真宗本願寺派の寺であり、現在は東京都世田谷区宮坂二―二十四―五にある。再建されたものではあるが、杉風の墓があることで知られる寺院である。御住職の廣岡隆信氏にうかがったところ、同寺は本来築地本願寺の地中(境内地)に存していたが、大正十二年の関東大震災において全焼し、本尊の阿弥陀如来像と軸物数本を持って避難したものの、墓所も殆ど熱のために倒壊し、判らなくなってしまうたことである。昭和三年に現在地に移転したそうであるが、不角に関する物は現在は何一つ残っていないとのことであった。不角の墓は『俳諧人名辞典』(前出)によると「東京市指定史蹟」であったとされ、おそらく関東大震災以前は築地本願寺地中成勝寺に存在していたものと思われるが、現存はしないことが確認された。

また「辞世二句を遺せり」(五十三・才)とあることより、不角には辞世の句が二句存したことが知られる。一句はさきの「空蟬はもとの裸に戻けり」であると思われるが、いま一句は現在伝わって

おらず、不明である。不局、寿角の「哭先考辞」文中に「門弟衆中へわかれの一句、また空蟬の辞世を吐て」(二十九・才)とあり、「故宗匠の遺吟を聞て、時八夏も過ぎぬれば／今聞も遺響高し蟬の声」という句の後に「又、衆人へ残されし一句に働して」という詞書をもつ知久麻の句(三十一・才)に「時鳥」が詠み込まれており、その他の門人が詠んだ句においても「空蟬」とならんで「時鳥」を詠み込んだものが多いことより、いま一句は「時鳥」を詠み込んだ句であつたかと思われる。未発見の『蟬の聲』上巻には、現在は知られない「門弟衆中へわかれの一句」にあたる、二句の辞世のうち的一句が書かれている可能性もあり、『蟬の聲』が『俳諧書籍目録』(前出)に名前が見える『うつ蟬』と同一の書であるのかどうかを確認するためにも、上巻の発見がまたれるところである。

付記 本稿をなすにあたり翻刻を御許可下さいました愛知県立大学附属図書館、便宜を図つて下さいました高木元氏、並びに資料の閲覧でお世話になりました天理図書館にお礼申し上げます。また、伏見山成勝寺御住職廣岡隆信氏に問い合わせに對する丁寧なお返事をいただき、『伏見山成勝寺誌』(廣岡隆信氏監修、伏見山成勝寺発行)の小冊子をいただきました。記してお礼申し上げます。

(注1) 『俳文学大辞典』(角川書店 平成七年十月)の「不角」の項には「うつ蟬」によつたとする記述があるが、同項の執筆者である安田吉人氏にうかがつたところ、これは今回底本に用いた愛知県立大学古俳書文庫蔵版本を「うつ蟬」であると推定しての記述であるとの御返事をいただいた。

(注2) 素竹「○俳士の墓(其二)」(後出)による。竹内玄玄「著『俳家奇人談』巻之下(文化十三年刊。雲英末雄氏校注『俳家奇人談・続俳家奇人談』岩波書店 昭和六十二年十月)によれば末五「返しけり」。

(注3) 築地成勝寺。